きべりはむし

第18巻　第1号

目　　次

兵庫県のグンバイムシ(1)	高橋　寿郎	1
尼崎西南部の昆虫(2)	新家　勝	5
ユリクビナガハムシについて	高橋　寿郎	9
ユリクビナガハムシの採集例	永幡　嘉之	12
西田雅昭氏採集三木産数種のハムシの記録	高橋　寿郎	14
ニシキキンカメムシをめぐって	高橋　寿郎	16
アオドウガネの食草についての報告（続報その4）	新家　勝	20
武庫川でマルタンヤンマの産卵を目撃	新家　勝	21
クロオビシロタマゾウムシの産地	高橋　寿郎	21
県関係文献紹介		22
学会誌・同好会誌・連絡誌		24
会員異動		24

兵庫昆虫同好会

1990年5月

兵庫県のグンバイムシ（1）

高　橋　寿　郎

グンバイムシ科（Tingidae）のものは半翅鞘が細かい網目状をしていて lace-bugs ともいわれている。食植性の小形種である。よく見るとなかなか面白い格好をしていて捨て難い虫であるが、何分にも小さいのであまり注意が払われていない様であるが、種々の植物を加害する害虫として忘れることの出来ない種を含んだグループと考えられる。

日本産のグンバイムシに就いての研究は SCOTT に始まり（1874,1880）、UHLER（1896）、HORVATH（1912）その他一・二の外国人により断片的に記載された以外は松村松年博士が数種の記載をされている位であまりなかったが、なんと言っても武谷　直氏による一連の分類学的研究（1930,1931,1932,1933,1951,1962,1963）によりほとんどその全貌がわかってきていると言うのが現状であると思われる。特に武谷　直氏の報文には図が多く入って全般に検索表もついているので同定には大変助かる。図説としては原色図説をふくめて江崎悌三博士（1950,10種）、宮本正一博士（1965,22種）、日浦勇氏（1977,11種）とあり科の概説としては武谷　直氏（1931,1962）、石原　保博士（1971）のものがある。さらに C. E. LEE による24種の幼虫の図説（主として5令幼虫）、並びに20種の♂交尾器の図説は大変貴重である（1969）。

日本産本科のものは何種類なのか。最近出版された"日本産昆虫総目録. I"（1989）によると日本産グンバイムシ科は2亜科、25属、69種が収録されておりA記号で日本に分布すると予想される種類に対してこの数字は90%以上になるとなっている。

兵庫県からのこのグループの記録は大変古くまず井口宗平氏が1908年には佐用郡産5種（内2種はよくわからない）を記録しておられる。武谷　直氏の一連の分類学的研究（1931,1951,1962,1963）の中でも井口宗平氏採集の播磨産のものは13種も記録しておられ、内1種は播磨産をタイプに武谷直氏の記載された種もふくんでいる。その後山本義丸氏は（1954,1958）氷上郡から7種を記録、1973年友国雅章氏は淡路島から4種を記録されている。高橋　匡氏は但馬から3種を記録された（1975）。筆者も県下のまととめを発表させて頂いて12種を記録した（1974）。大体以上が兵庫県下から発表されたこの科の報告であると思われる。

筆者は好きな虫の関係で出来るだけ注意して採集してきたのであるが、何分にも片手間での調査で充分な資料がまだ集っていないのであるが、今迄の記録と筆者の資料をもとに現時点でこの科の兵庫県産をまとめて見ることにした（前回の発表で同定違いもあったりするので―）。何分にも資料が少

なく、特に県中央部から北の部分ではとんど見るべき資料もなく筆者も未調査なので出来るだけこれ等の地域の調査をやらなくてはと考えている。

上記諸士の記録と筆者の資料で今回まとめた兵庫県産グンバイムシ科は17種であり、日本産の半数にも達していない。これは余りにも少ないと考えられる。今後の調査に期する所大といえる（都合で分割発表させて頂く御了承の程をお願いする）。

Family Tingidae　グンバイムシ科

Subfamily Cantacaderinal STÅL

1. *Cantacader lethierryi* SCOTT, 1874　ウチワグンバイ

本種は SCOTT' により G. LEWIS の日本で採集した標本に基いて新種記載されたものである。産地が記されていない長崎産であるのか、兵庫産のケースも考えられる。

江崎博士は図説の際、本州及び九州に産するが少ないとされている。宮本博士も越冬中の成虫は雑草の根際、石下などで発見されるがまだ宿主植物や幼虫が発見されていないと記しておられる。兵庫県下の記録でもいわゆる寒い季節での採集が多いようでこの点、分布は広いが（本州、佐渡、四国、九州、台湾）採集されることが少ないのではないだろうか。LEE による5令幼虫と♂交尾器の図説がある（1969）。

産地：神戸市［17—XII—1937, K. KUROSA leg., TAKEYA, 1962］*、宵谷［2 exs., Mar. 1934, 足立、1934］、白川（2exs., 22—II—1979）。Harima, Prov.［I・II—1953, S. Iguch I leg., TAKEYA, 1951, 1962］。氷上郡［山本、1954, 1958］。豊岡市内［15—IX—973, 高橋、1975］。

Subfamily Tinginae STÅL

2. *Agramma nexilis* (DRAK, 1948)　ズグロナガグンバイ

DRAKE は *Serenthia* 属で記載している。原記載を見ていないので良くわからないが北海道と台湾で採集されたものによって記載されている様である。江崎博士は広島県三段峡産で本州に分布していることを報じられたと同時に図説もしておられる（1950）。一応江崎博士も武谷氏も *Serenthia* 属に扱っておられるが1962年武谷氏は *Agramma* 属の種にされ、同時に DRAKE の記載した *Serenthia japonica* もこの種のシノニムにされている。

宮本博士もカラーで図説され蔭地または湿地のスゲその他雑草間で発見されるとされている（1965）。日浦氏の原色図説もある（1977）。

---

*産地のところで［　］の中のものは記録からの引用、（　）の中のものは筆者採集標本所有のもの

兵庫県下からは淡路島から知られているだけである。恐らく調査不十分のせいと思われる。LEE による5令幼虫、♂交尾器の図説がある（1069）。

産地；洲本市三熊山［6 exs.，IX—1972，友国、1973］

3．*Perissonemia occasa* DRAKE, 1942　ヒゲナガグンバイ

Drake により Japan を産地に記載された（1942）（詳しい産地の記入がないと）。その後武谷氏は井口宗平氏採集の播磨産を記録された（1942）。図説が見られないので良くわからないが、同属の台湾産の記載を武谷氏がされた際（1962）、全形図を入れておられるので大体の見当はつけられる。筆者未採集である。

産地：Harima Prov.［2—VII—1906，S. IGUCHI leg.，TAKEYA, 1962］

4．*Copium japonicum* ESAKI, 1931　ヒゲブトグンバイ

江崎悌三博士が1931年命名記載された種である（Paratypus に井口氏採集の Harima 産 lex. が含まれている）。兵庫県下での記録は古く井口宗平氏が佐用郡を産地に記録されている（1908．学名は *Capium clavieorna* となっている）。

図説は江崎博士（1950）、宮本博士（1965）、立川周二氏（学研中高生図鑑　昆虫III、1975）、日浦氏(1977) とある。イヌコウジュ・シモバシラ・ツルニガクサなどの花蕾に寄生し、嚢状の虫瘿をつくることで良く知られている。分布も広いのであるが兵庫県下からはほとんど記録がないし、筆者も未採集である。多分調査不充分のためと考えられる。LEE による♂交尾器の図説もある（1969）。

産地：佐用郡［井口、1908］。Harima［S. IGUCHI leg.，TAKEYA, 1931，1951，1962］

5．*Tingis ampliata* (HERRICH-SCHÄFEER, 1839)　アザミグンバイ

Mananthia 属で記載された種である。

成虫は夏季アザミの葉の裏面にすむが幼虫は花蕾苞の鱗葉の間で生活することが知られる。ヨーロッパ及びアジア大陸の温帯圏に広く分布する種である。図説も江崎博士（1950）、宮本博士（1965）、日浦氏（1977）とある。

兵庫県下にも広くいるように思われるが、どうしたわけか次の記録を知るのみである。今後の調査に待ちたい。

産地：氷上郡［山本、1954，1958］

6．*Acalypta sauteri* DRAKE, 1942　マルグンバイ

本種は樹幹に付着したコケの間に生息する種として知られている。図説は宮本博士のものが知られ

ている位であったが（1965）、友国雅章氏による *Acalpta* 属の日本産の分類学的論文（1972）の中で図をつけて記載しておられると共にその産地を詳しく記しておられる。これを見ると割合広く分布している種のようである。LEE は♂交尾器を図説している（1969）。

兵庫県下からは淡路島の産が知られているだけである。

産地：三原郡論鶴羽山［6♂、9♀、nymphs 2—I—1965, M. SAKAI leg., TOMOKUNI, 1972. 5 exs., X—1972, 友国、1973］。洲本市先山［11exs., X—1972, 友国、1973］。

7. *Uhlerites debile* (UHLER, 1896)　ヒメグンバイ

UHLER により、*Phyllontocheila* 属で記載された種である。武谷氏による詳しい図説がある（1931）。LEE は1—5令幼虫、♂交尾器を図説している（1969）。

クリ・クヌギ・コナラなどの葉裏に寄生することが知られている普通種。兵庫県下でもごく普通に採集できる。

産地：洲本市先山［友国、1973］。川西市能勢妙見山（lex., 30—VII—1982）、神戸市烏原（lex., 27—V—1980, lex., 9—V—1981, 2 exs., 14—V—1981, lex., 20—VIII—1981, lex., 5—V—1982, 2 exs., 6—V—1982, 4 exs., 18—V—1982, 3 exs., 23—VII—1982）、伊川谷前開（lex., 19—V—1988, 2 exs., 21—IX—1988）、Harima［TAKEYA, 1931, 1951, 1962］。三木市細川中（lex., 19—IX—1985）、口吉川町（lex., 3—X—1986）。美嚢郡吉川町（lex., 29—VIII—1985）、奥山（les., 8—V—1986）。多可郡鳥羽（lex., 6—IX—1975）。竜野市神岡（lex., 8—IX—1988）。佐用郡［井口、1908］。揖保郡鷄籠山（lex., 27—V—1970）。氷上郡［山本、1954, 1958］。城崎郡日高町奈佐路（lex., 19—VI—1986）。

8. *Uhlerites latius* TAKEYA, 1931　クルミグンバイ

井口宗平氏採集の Prov. Harima, Honshu 産を Holotype に（詳しいデータ無し）して武谷直氏が *Uhlerites latiorus* TAKEYA ミツマタグンバイとして記載された種である。図もついている。その後県での記録が全く現れていないし、筆者も未採集である。

宮本博士の原色図説もある（1965）。オニグルミの葉裏に寄生するとのことで分布は本州、九州、支那とあるがそれほど普通に見られないのかもしれない、LEE による4，5令幼虫及び♂交尾器の図説がある（1969）。

産地：Prov. Harima［Holotype. S. IGUCHI les., TAKEYA, 1931］。

9．*Stephanitis ambigua* HORVÁTH, 1912　ヤマコウバシグンバイ

江崎博士と武谷氏の図説がある（1931）。武谷氏は朝鮮ではダンコウバイを食するとされ（1951）、九州ではヤマコウバシ（*Lindera glacum* BLUME）の葉を食しているのを採集したとも述べられておられる（1953）。さらに信濃ではシロモジを食していると記されている（1963）。LEE により4，5令幼虫及び♂交尾器が図説されている（1969）。県下では次の記録を知るのみである。

産地：Akashi［HORVÁTH, 1912—TAKEYA, 1951］

尼崎西南部の昆虫（その2）

新家　勝

Ⅳ　Lepidoptera　鱗翅目

1　Hesperiidae　セセリチョウ科

(1)　Pelopidas mathias oberthüri Evans　チャバネセセリ

1945.10.17

セイタカアワダチソウの花に群がるイチモンジセセリに混じって吸蜜していたもので、多くはなかった。

(2)　Parmara guttata Bremer et Grey　イチモンシセセリ

1950.8.20

オオイボタ、ヘチマ、セイタカアワダチソウの花に多数吸蜜に来た。

2　Papilionidae　アゲハチョウ科

(1)　Graphium sarpedon nipponum Fruhstorfer　アオスジアゲハ

1947.6.30　1♂，1947.7.18　1♀，1950.4.16　1♂，1949.6.30　1♂

ネギ、オオイボタの花によく吸蜜に来た。いたるところのクスノキで発生していた。

(2)　Papilio machaon hippocrates C.et R. Felder　キアゲハ

1943.8.11　1♂，1950.6.18　1♀

8月、日当りのよい武庫川堤防の斜面で見られたが、不思議に春型を見たことはなく、少

ないものであった。武庫川沿いの水路に生えるセリで発生していたと思われる。

(3) Papilio xuthus Linné　アゲハ

1950.4.16　春♂、1947.5.2　春♀、1947.6.26　夏♀、1950.5.5　春♀

ヒラド、オオイボタ、センダン、サルスベリなど各種の花に飛来した。民家の甘橘で発生していた。

(4) Papilio protenor demetrius Cramer　クロアゲハ

1950.6.30　1♂、1943.5.15　1♀、1948.8.22　1♀、1950.5.1　1♂

時々、庭へ飛来した。素盞嗚神社北側のナツミカンで幼虫が見られることがあった。しかし、カラスアゲハは見たことがなかった。

3　Pieridae　シロチョウ科

(1) Pieris rapae crucivora Boisduval　モンシロチョウ

1946.4.4　1♂、1950.4.16　2♀

家庭菜園のダイコン、シャクシナなどは、直ぐに丸坊頭になるほど多産した。

(2) Eurema hecabe mandarina de l'Orza　キチョウ

1947.10.21,1948.10.22,1949.10.1,1949.10.9,1949.10.16

オオイボタ、セイタカアワダチソウの花によく吸蜜に来た。

(3) Colias crate poliographus Motschusky　モンキチョウ

1947.10.21,1948.10.22,1949.10.1,1949.10.9,1949.10.16

オオイボタ、セイタカアワダチソウの花によく吸蜜に来た。

4　Lycaenidae　シジミチョウ科

(1) Lycaena phlaeas Seitz　ベニシジミ

1947.6.22,1949.10.16,1949.10.21

(2) Lampides boeticus Linné　ウラナミシジミ

1949.10.1　1♂、1949.10.7　1♂、1949.10.25　2♀

セイタカアワダチソウによく吸蜜に来た。秋型は多いが、春型は見たことがなかった。

(3) Zizeria maha argia Ménétriés　ヤマトシジミ

1949.9.24　3♂、1950.5.7　1♂、1949.10.16　1♀

(4) Celastrina argiolus ladonides de l' Orza　ルリシジミ

1947.6.20　1♂、1948.6.13　1♂、1950.5.4　1♂、1949.9.25　1♀

(5) Narathra jappnica Murray　ムラサキシジミ

1949.12.2,1949.12.4

アラガシでよく見られたが、初冬の頃、ヤツデの花で吸蜜中のものは捕えやすかった。

5 Nymphalidae タテハチョウ科

(1) Vanessa indica Herbst アカタテハ

1947.10.19

ヒメアカタテハも普通で、セイタカアワダチソウによく来たが、標本は破損したため廃却してしまった。ルリタテハ素盞嗚神社のアキニレの樹液で時々見られたが、これも標本は破損したため廃却してしまった。

(2) Polygonia c-aureum Linné キタテハ

1950.7.4 1♂、1947.6.14 1♀

秋型はセイタカアワダチソウの花によく吸蜜に来た。

(3) Apatura ilia substituta Butler コムラサキ

1949.6.1

民家に栽植されているシダレヤナギでよく発生していた。

(4) Hestina japonica C.et R.Felder ゴマダラチョウ

1949.5.31

武庫川堤防のエノキの梢を飛び回るのがよく見られた。素盞嗚神社のアキニレの樹液に飛来したほか、食べ残しのスイカを捨てると、吸汁に来ることがあった。

6 Satyridae ジャノメチョウ科

ヒメジャノメ1種を産し、イチジクの樹液によく集ったほか、ごみにも集まった。標本は破損したため廃却してしまった。

7 Sphingidae スズメガ科

(1) Herse convolvuli Linne エビガラスズメ

1947.5.25

(2) Psilogramma increta Walker シモフリスズメ

1947.6.30

オオイボタ、キンモクセイ、ムクゲでよく発生していた。

(3) Clanis bilineata tsingtauica Mell トビイロスズメ

1947.6.28,1950.6.14

武庫川堤防のニセアカシアで発生していた。モモスズメ、ウンモンスズメ、ウチスズメも普通に見られたが、標本は破損したため廃却してしまった。

(4) Cephanodes hyalis Linné オオスカシバ

1947.6.8,1947.6.24

クチナシ、コクチナシでよく発生していた。

(5) Gurelca himachara sangaica Butler　ホシヒメホウジャク

1947.6.24

(6) Macroglossum pyrrhosticta Butler　ホシホウジャク

1949.10.1

(7) Theretra japonica de l'Orza　コスズメ

1947.6.21

(8) Theretra oldenlandai Fabricius　セスジスズメ

1946.6.14

サトイモ、ホウセンカで発生していた。

(9) Theretra nessus Drury　キイロスズメ

1950.8.12

ヤマイモでよく発生していた。ベニスズメはミソハギで時々、発生していた。

8 Saturniidae　ヤママユガ科

(1) Antheraea yamamai Guérin- Méneville　ヤママユガ

1949.10.9　1♂

自宅のアラガシで発生したもの。近所のアラガシでも時々、幼虫が見られたが、捕まえて自宅のアラガシを与えても食したことがなかった。

シンジュサンは、毎年素盞嗚神社のクロガネモチで多数発生していたが（第17巻第1号参照）、クスサンは武庫川堤防のイチョウで多数の繭を見たことがあるのみであった。アラガシで育つヤママユは散発的に、シンジュサンはクロガネモチで定常的に発生し、クリのないこの地域でクスサンは稀に発生していたといえよう。

9 Aganaidae　トラガ科

(1) Seudayra subflava Moore　トビイロトラガ

1950.5.14

10 Noctuidae　ヤガ科

(1) Diarsia canescens Butler　オオバコヤガ

1949.9.21

(2) Amphipyra livida Motschulsky　カラスヨトウ

1946.7.3

(3) Adris tyrannus amurensis Staudinger アケビコノハ

1949.9.5

11 Notodontidae シャチホコガ科

(1) Phalera fuscescens Butler ムクツマキシャチホコ

1949.8.17

12 Limantriidae ドクガ科

(1) Euproctis similis Fuessly モンシロドクガ

1947.6.30

(2) Euproctis pseudoconspersa Strand チャドクガ

13 Lasiocampidae カレハガ科

(1) Gastropacha populifolia Esper ホシカレハ

1945.6.5,1949.7.25

(2) Philudoria alubomaculata Bremer タケカレハ

1946.6.10

(3) Dendrolimus spectabilis Butler アツカレハ

ユリクビナガハムシについて

（兵庫県甲虫相資料・236）

高橋寿郎

ユリクビナガハムシ *Lilioceris merdigera* (LINNÉ) は LINNÉ がヨーロッパ産で *Chrysomela merdigera* として記載されれた種である（Syst. Nat. ed. p.375, 1758）。

ヨーロッパでは良く知られている種のようであり、E. RETTER の Fauna Germanica Ⅳの中でカラー図説されている（p.80, Tafel. 142, f. 3, 1912）。また、G. PORTEVIN の Coléopterés de France Tome Ⅲ の中でも（p.190, f. 349, 1934）図をつけて解説がある。

本種が日本から記録されたのは狩谷精又氏の佐賀県からのものが始めての様である（農事改良資料

第40号、1932. 同55号、1933）。 このことは湯浅啓温博士が解説され（昆虫、Vol. 13, No. 5/6, p.199-202, 1939）同時に本種の福岡、長崎両県と朝鮮、樺太産も報じておられる（土井久作氏が樺太産で *Crioceris nigritarsis* と新種記載された種—動物学雑誌 Vol. 47, No.479, p. 372-373, fig. 1, 1928-)は湯浅博士によりこの種のシノニムとされている）。

GEMMINGER et B. のCatalogus Coleopterorum Tome XI. Chrysomelidae (Part. 1)、1874によるとヨーロッパでは多くの変種があり（p.3264-3265, *Crioceris* 属）、H. CLAVAREAU の W. JUNK Coleopterorum Catalogus Pars. 51, 1913 によると分布が Europa, Asien, Mexiko, Brasilien となっている（p.48. *Crioceris* 属）。

朝鮮での記録は前記湯浅博士のもの以外に中條博士のもの（Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa. Vol. 30, No. 204, p.350-351, 1940. *Crioceris* 属）があり、岩本新一氏が金剛山に産すると報じたカラフトアカハムシ *Crioceris nigrotarsis* DOI (Study of Insects, Vol. 1, No.1, p.19, 1937) も本種のことである。

中国大陸からの報告は J. L. GRESSITT & S. KIMOTO 両博士による The Chrysomelidae (Coleop.) of China and Korea Part. 1, Pacific Insects Monog, 1A:54, 1961 の中で中国、朝鮮の産が記録されていると共に JUANJI. T, et al. Economic Inseert Fauna of China. Fasc-18, p.86-87, pl. Ⅶ, f. 67, 1980にもカラーで図説中国での産地が入っている。

台湾からは中條道夫博士が始めて記録された（Tech. Bull. Kagawa Agr. Coll. Vol. Ⅱ, No. 2, p.85-87, 1951）。

九州からは割合と産することから早くから記録があり、九州での生態の発表が高倉康男氏（北九州の昆虫、Vol. 8, No. 1, p.1-2, 1961）、日野隆之氏（採集と飼育 Vol. 23, No.1, pp. 22-23, 1961）とある。

本州からの本種の記録は水戸野武夫氏が島根から記録されたのが始めてではないかと考えられる（新昆虫 Vol. 9, No. 10, p. 29, 1956. 和名のみ）。

中條道夫・木元新作両博士による Systematic Catalog of Japanese Chrysomelidae (Coleoptera)。（Pacific Insects Vol. 3, No. 1:126, 1961）にも本州、九州を分布にあげられているが、具体的な産地は出ていない。

木元新作博士の The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands Ⅱ (Jour. Fac. Agr. Kyushu Univ. Vol. 13, No. 1, 1964, p.133) でも日本（本州、九州）が分布とになっているが九州産の具体的産地はあっても本州産の産地は全く示されていない。

本種の図説は夫々原色昆虫大図鑑第2巻（甲虫編）（中根猛彦博士担当。pl. 161, f. 15, p.322, 1963）、原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）（木元新作博士担当。pl. 30, f. 6, p.155, 1984）に夫々カラー

で図説されているが分布は本州、九州で四国の分布が知られていないようである。

高倉氏は前の報文で手許に岩田久二雄博士採集の兵庫県篠山産の標本があるとされており（データ無し）、大野正男教授は南会津と林匡夫博士採集の大阪府能勢産の各１頭を記録された（昆虫と自然 Vol. 15, No. 8, p.44, 1980）。以上が筆者の知り得た本種の本州からの記録であり、本州からの記録は他にもあるのだろうと思うが可成り少ない種の１つの様に思われる。

ユリクビナガハムシの
国内分布記録地

兵庫県下での記録は前記篠山が１例あるだけの珍しい種になると思われる。

ところが三木市口吉川で永幡嘉之氏が可成り前に本種のいることを確認され、その後稲見　誠氏も同じ所で採集しておられる様で（永幡嘉之氏はその内の１♂をわざわざ1989年10月29日拙宅へ持参、見せて下さった）。稲見　誠氏採集のものは1989年10月28-30日神戸市立青少年科学館で開催された日本学生科学賞兵庫県審査出品展に出品された10exs.（三木市口吉川町大島産、1ex., 19-Ⅵ-1988, 6 exs.,26-Ⅵ-1989, 3exs., 10-Ⅶ-1988）を見せて頂いた（稲見　誠氏の同級生西田雅昭氏の私信によると他にも採集されているようである）。その生態とか発見、産出の経緯とかは永幡嘉之氏が詳しく報告して下さると思うので、この珍しいハムシが県下には意外と多くいることを此処に報告させて頂く。

尚、食草は九州の佐賀県ではクロジクテッポウユリ、アオジクテッポウユリ（湯浅、1939.日野、1961）。福岡県でテッポウユリ（高倉、1961）が報告されているが、永幡氏の御教示によると、三木市ではコオニユリとオニユリからのみ採集出来て、テッポウユリ、カノコユリ、ササユリ、チゴユリ

などからは見出したことがないとのことであった。

末筆ながらこの珍しい種の分布を御教示下さり、さらに日野氏の報文を教えていただきコピーまでして下さった永幡嘉之氏に厚く御礼を申し上げる。

ユリクビナガハムシの採集例

永　幡　嘉　之

ユリクビナガハムシ Lilioceris merdigera（LINNÉ）はあまりその名を知られていないが、鮮紅色の美しいハムシである。私は小学生の頃（1980年頃）から、アカクビナガハムシによく似た別種がいることに気付いていた。その後追加記録も出、また県内では篠山町での1例しか記録がないこと[1]も分かり、今回三木市内での本種の記録を報告したい。

<採集例>

三木市口吉川町善祥寺。　1♂、1♀。5 —V—1984、永幡嘉之。

三木市口吉川町大島。　1 ex.,19—VI—1988、稲見　誠。

三木市口吉川町大島。　1 ex.,26—VI—1988、稲見　誠

三木市口吉川町大島。　10exs.,10—VII—1988、稲見　誠

三木市口吉川町大島。　1 ex.,30—IV—1989、稲見　誠

三木市口吉川町大島。　1 ex.,10—VII—1989,稲見　誠

三木市本町。　1 ex.,24—V—1989、永幡嘉之

さて、三木市内の本種について考える上で最も重要なのはその食草である。大島ではオニユリとのことで、善祥寺、大島でもオニユリかコオニユリのどちらかにはいた。だが、当時はムカゴの有無にまで注意を払わなかったのでどちらか分らない。ただ、善祥寺では丈は低いながらもムカゴはついていたように記憶している。とにかく、オニユリ類であることは間違いなく、その種類の確認が今後の第一の課題である。

生息環境は、本町では山裾の畑地、大島では庭園内、善祥寺でも山裾の庭内であった。いずれの地もかなり自然度の高い所である。

次に、オニユリとコオニユリが三木市内にも自生しているかしていないのかということを調べてみ

た。部分的には自生かと思わせるような生え方をしているものもあるにはあるが、民家のすぐ近くである。また、紅谷（1971）や多くの図鑑類を見ても、コオニユリは山地性、オニユリは帰化種とのことで、三木市内に自生のものがあるとは考えにくい。人家の庭によく植えられる種であることと併せて、市内で林縁部などに生えているものは、付近の民家から拡がったものであると考えられる。

するとにわかに大きな問題が浮かび上がってくる。すなわち、土着か帰化かという問題である。様々な仮説は立てられるが、これを論ずるのはもっと記録が増え、県内での産出状況がいくらか明るみに出てからでも遅くはないと思う。私自身の経験を通してみても、この種が絶対数の少ない珍品であるとは思えない。ただ、生息している環境が、やや自然度の高い庭園や畑という、普通の調査では見落しがちな盲点であるが故に、気付かれずにきたのであろう。確かに、野外の調査では目にふれにくい種ではある。

佐賀県では本種が輸出ユリ栽培地検査の際発見されたとある。その時、食草としてクロジクテッポウユリとアオジクテッポウユリの2種が報告されている。[2]

今後、庭園のオニユリ類にはぜひ注意をはらっていただきたい。アカクビナガハムシをひとまわり小さくし、脚を赤くして、背面もいっそう鮮かな赤にしたようなハムシがいたら、本種である。大島では4～8月に見られたというが、これは善祥寺での私自身の経験ともよく一致する。ユリの葉先を後食し、葉上で交尾中のものもよく見られた。捕えると赤い汁を出す。

末筆となりましたが、本稿を書く上でいろいろお世話になりました高橋寿郎氏、ユリの分布について御教示いただいた兵庫教育大学の山田卓三教授、そして市内での本種の記録並びに知見を教えていただいた稲見誠氏、西田雅昭氏に厚くお礼申し上げます。

(25. Feb. 1990)

<参考文献>

1) 高橋寿郎（1981）、兵庫県のクビナガハムシ。てんとうむし(7)：10—14。

2) 日野隆之（1961）、ユリクソハムシの生態。採集と飼育　23(1)：22—23。

西田雅昭氏採集三木市産数種ハムシの記録

（兵庫県甲虫相資料・237）

高橋寿郎

三木の中学生西田雅昭氏はハムシが好きで、ハムシと食草の分布調査をテーマに一年生のときから取り組んでこられ時々筆者の所へもお便りを頂いたりしたが、1989年10月お手紙を頂き中学生最後のしめくくりとして平成元年度日本学生科学賞兵庫県審査出品作品に選ばれ10月28日—30日間神戸市立青少年科学館別館4階に展示されているので都合がついたら見てほしいむね御連絡を頂いたので10月30日見せて頂いた。“三木市大村のハムシと食草分布”と題して壁に詳しく観察の状況を説明され、同時にドイツ型標本箱大2ヶにハムシ標本が多数出品されていた。標本は全部台紙に貼付されているが、整脚されていてはっきりしたラベルと共に気持の良い美しい標本で驚いた。その中で兵庫県産ハムシとして記録しておいたら良いものが何点かあったので出品者西田雅昭氏の御了解を得て此処に記録をさせて頂きたいと思う（採集者は全部西田雅昭氏でなく他の方の採集品もあるので、それ等は個々の種の説明の所で入れおいた）。この様な立派な標本を見せて頂く機会を頂き発表を許され、さらに個々の種についての採集状況を詳しく御教示下さった西田雅昭氏に厚く御礼を申しあげさせて頂きたい（既に本誌前号で紹介しておいた様に此処に記録のハムシ類は三木中学校生物部採集報告書、1989の中に収録されているものであるが、一般には見る機会が少ない報告書と考えられるので、あえて此処にその内のいくらかを再記録させて頂いた）。

○ キンイロネクイハムシ *Donacia japana* CHUJO et GOECKE, 1956

本種は県下では宝塚市大原野、養父郡氷の山々麓の2ヶ所が知られており、大原野では多数いることが報じられているが、その他の地では全く記録が見られない。この度三木市大村産の1ex.（2- V-1987）を見ることが出来た（採集者は永幡嘉之氏で氏の私信によると、採集地にはスゲ類が生えており大村には転々とスゲ類が見られるとのこと）

○ ユリクビナガハムムシ *Lilioceris merdigers* (LINNÉ, 1958)

従来兵庫県下からは多紀郡篠山1ヶ所だけが知られていただけであったが、三木市口吉川町大島に

は割合いることがわかった（1ex.，19-Ⅴ-1988，6exs.，26-Ⅵ-1988，3exs.，10-Ⅶ-1988）（採集者は稲見　誠氏で西田氏のお便りによると、実際はもっと採集されている模様）。

本種に就いては別に詳しく報告させて頂く。

出品標本の中にトゲアシクビボソハムシ *Lema cornata* BALY, 1873 が2exs.（1ex.，18-Ⅵ-1987，1ex.，29-Ⅵ-1987）あったが（報告書では3exs.，29-Ⅵ-1987となっている）　この標本はその後永幡氏が再検討してキバラルリクビボソハムシ *Lema concinnipennis* BALY, 1865の同定誤りであることがわかったと御連絡頂いた。従って報告書も訂正しなくてはいけない。キバラルリクビボソハムシは兵庫県下に広く分布し、特に神戸市内では普通に得られるクビボソハムシである。

○　トホシクビボソハムシ　*Lema decempunctata* GEBLER, 1830

クコクビボソハムシとも言われクコを食草とするハムシで一時クコが流行した時期、割合と見ることの出来たハムシのように思うが、最近は余りお目にかかられなくなった様にも思われる。川西市大和には多産の報告もあるし（仲田、1980、1982）、神戸市内でも採集出来ている。美方郡浜坂町あたりの記録もある（磯野、1985）。

三木市末広　4exs.，30-Ⅳ-1988，9exs.，11-Ⅵ-1988（報告書では 1ex.，23-Ⅳ-1988，14exs.，30-1 2exs.，11-Ⅵ-1988となっており、西田氏からの私信では1989年５月４日に１♀を採集しているし、三木市本町で永幡嘉之氏が1ex.，29-Ⅳ-1987採集しておられると。三木市内では広い範囲にごく普通に見られるが個体数の変動がはげしいと西田氏は言っておられる）。

さらに西田雅昭氏からの私信ではキオビクビボソハムシ　*Lema delicatula* BALY, 1873を自宅（三木市末広町）で目撃（5-Ⅴ-1989）したが逃げられたとのことであった。この種も県下での記録はそれ程多くないが、どうしたことか神戸市烏原貯水池畔では可成り採集出来る種である。

西田氏からは三木市正法寺のスダジイの樹皮下からイチモンジハムシ *Morphosphaera japonica* (HORNSTEDT) を採集（4exs.，1-Ⅷ-1988）。　さらに口吉川町善祥寺でクモの巣にかかった1ex.を得たとの御連絡を頂ている。この種は良く知れているように日本産ハムシの中で一番早く記載された（1788。徳川第11代家斉の治世）種として良く知られている。分布も割合広いようであるが、それ程普通に見られると言ったハムシではないようである。兵庫県下では次の様な産地があり、特に神戸市内烏原貯水池畔では多く産する。食草はイヌビワ、オオイタビ、オオバアコウなどが知られている。

兵庫県下の産地。洲本市先山［堀田、1976］。川西市笹部［仲田、1978、1982］。神戸市摩耶山（3exs.，27-Ⅴ-1953）、烏原貯水池畔（2exs.，30-Ⅴ-1973～1ex.，30-Ⅶ-1984，30exs.）。三田市千

刈貯水池東岸大岩山（1ex.，6-Ⅶ-1973，1ex.，8-Ⅵ-1974，1ex.，20-Ⅶ-1974）。氷上郡沼貫［山本、1953］。城崎郡日高町岩中［高橋、1976］。美方郡浜坂町字都野神社［磯野、1985］（ⅩⅡ-1989）

追記。本稿脱稿後平成2年1月14日（1990）西田氏より以上のべたものの内、ユリクビナガハムシ5exs．トホシクビボソハムシ4exc．をわざわざ御恵送頂いた。厚く御礼を申しあげさせて頂く。

また、三木中学校生物部採集報告書に記録されているヤナギホシハムシ2exs．も御恵送頂いたが之は残念ながらアカタデハムシ *Pyrrhalta semifulva* (JACOBY) と同定すべきであった（西田氏はシダレザクラをすくって得たと言っておられた 14-Ⅴ-1988、11-Ⅵ-1988、サクラを食草にしているハムシである）。

（Ⅰ-1990）

ニシキキンカメムシをめぐって

高　橋　寿　郎

1989年8月15日一通の封書を受けとった。差し出された方は大西　旦（あきら）と言う方で筆者にとっては初めての方である。拝見するとニシキキンカメムシの生きている写真を撮りたい。昆虫が好きで10年程カメムシに興味を持って調べているとのこと（同封の名刺には小学館第一編集部副編集長とある）。神戸に来た時拙著「六甲山の昆虫たち」を購入、読んでいてニシキキンカメムシが兵庫県の赤穂郡上郡と西宮に記録があるが（p.104）これらの詳しい産地とどんな所にいたかなどの状況を教えて貰えないだろうかとのことであった。実は上郡産のものは1967年8月神戸大丸屋上での恒例の神戸生物クラブ鑑定会の席上へ米村和繁氏採集の6exs.，（3—Ⅴ—1966）を持参されて見せて頂いたもので産地が赤穂郡上郡と言うだけで詳しい場所とか産出状況の説明は無かったと思う。西宮での記録は水谷芳昭・殿男和男氏が西宮市尼ヶ谷で採集された1♂2♀（昆虫と自然、Vol.4,No.3,p.24,1969）である。実は筆者も自分で本種を採集したことは無く県下の記録があるのでなんとか自分の手で採集して見たいものだ、と思いつつ現在にいたっているむね返事させて頂いた。同じ風のアカスジキンカメムシは兵庫県下でも割合とお目にかかれるのに、このニシキキンカメムシはどうも良くわからない。色々の文献を見ても九州では割合いるようだが、その他の地では可成り局所的産出しか知られていないようなので一つ県下での産を確認する努力をして見たいものだと思うと同時に、会員の皆様にも是

非この美しいカメムシの産地の発見に協力を頂きたいものだとニシキキンカメムシについて若干の今迄の知見をまとめて見た。充分な文献が無いので大変粗雑なものになっていることをお詫びする。まず初めにこのカメムシの全国的な分布を見てみる。

本種は御承知の通り故江崎悌三博士が1935年 *Poecilocoris splendidulus* ESAKI と命名記載された種である（むし Vol.8,No.2,pp.105-107）。タイプに使用されたのは3♂で♀は未知としてある。タイプの産地は Holotype, ♂、Hikawamura, near Tokyo, Prov. Musashi Honshu August 12, 1934. paratype, ♂、 Kurosawayama, Nachigun, Prov. Kii, Honshu July, 1933. paratype ♂、 Hirao near Fukuoka, Prov. Chikuzen, Kyushu となっている。即ち東京都氷川・奥多摩と和歌山県黒沢山、福岡市平尾となる。東京の産がタイプにあるのだがその後東京並びにその近くで本種が採集されていると言う記録を筆者は知らない。

和歌山県でのタイプの産地は那智郡黒沢山で植村利夫氏が採集されたものである。この那智郡と言うのは現在では無い様に思うのだが。最近的場　績氏が黒沢山沼地で本種が多数いたことを報ぜられたが、有田郡金屋町黒沢山沼地となっている（KINOKUNI,No.24,p.2,1983）。和歌山県からは他に次の様な産地の記録がある。海草郡野上町（後藤　伸、南紀生物、Vol.13,No,1,p.19,1971）、有田郡広川町霊巌寺山（楠井善久、昆虫と自然、Vo.7,No.3,p.33,1972）。

九州の産地はタイプは福岡市平尾となっているが、江崎博士は記載の翌年古処山で 200頭も採集されたと報告（むし、Vol.9,p.37,59-60,1936）されたことからこの山が一躍有名になったようであり多くの文献に産地の一つに必ず古処山の名は出て来る。同時に行徳直巳氏はこの山で採集した本種を飼育された記録を発表しておられる（ROSTRIA No.3,pp.55-56,1966）。なかにはこの山での採集失敗談もあったりする（太田良太、KORASAMA Vol.26,No.1,p.16,1988）。

九州での産地は他に余り知られていなく日高輝展氏も筑紫方面での発見は必ずしも可能ではないとされていたりする（筑紫の昆虫 Vol.2,No.2,p.23,1957）。

大西氏からの御教示では鹿児島県霧島山にいるとされているが詳しいこの記録は見たことが無い。

岡山県での本種の発見は1956年5月3日が初めてとのことである。その後何人かの方の報告が出た後、小野　洋・近藤光宏両氏による“ニシキキンカメムシの生態（予報）”と題して報文が発表された（すずむし　Vol.16,No.2～4,p.42-45,pl.1,1966）。この産地は阿哲峡（阿哲郡・新見の西側）のものであるが最近上川郡成羽町（高梁の西方、阿哲峡の南側）の産も報告されている（すずむし No.122,p.31,1987）。岡山を代表する虫の一つと言うこともあって次の様な文献があるのは岡山県の特色である（他府県ではこの様な文献は見られない）。1968年に倉敷昆虫同好会著「岡山の昆虫」（岡山文庫）の表紙には美しい本種のカラーで飾られており、また初めのp.14-15 には各ステージのカラーで紹介されており、P.156-157に写真を入れて解説されている。1978年岡山県から出版された

「岡山県の昆虫」（岡山県昆虫生息調査報告書）の中にも解説されている（p.29）。1988年出版された倉敷昆虫同好会編「岡山の昆虫」では新しい産地や成羽町でのカラー図説がある（p.142）。

広島県では比婆郡帝釈峡（ 帝釈峡内の雌橋付近の磯上で採集したとある。1ex.,15-V-1976）の記録があるだけである（比和の自然、p.248,1977。帝釈峡の自然、p.414,1987）。

東へ行って三重県では藤原岳が知られている（大川親雄、藤原岳の昆虫、p.20,pl.8,1961。石関正弘・庄山　守、ひらくら　Vol.14,No.10,p.88,1970）。

愛知県南設楽郡鳳来町黄柳野で採集された幼虫を代替餌により飼育した記録がある（守屋成一・大久保宣雄、Rostria No.38,p.558,1987）。

静岡県水窪町（井上智雄、昆虫と自然 Vol.15,No.14,p.11,1980）。

高知県南国市。大西氏の御教示による。1986年８月に採集されているとのこと。

ニシキキンカメムシの記録地

さて海外の記録と言うのは江崎悌三博士により神保一男氏が薑島（京畿道）にて1933年８月５日採集されたものを土井寛暢氏の手を経て検したものが本種であったとされたのが朝鮮からの初めての記録となる（むし Vol.9,p.37,1936）。京畿道であるからソウルの西方になるのであろう。朝鮮からの記録はこれだけしか見られなかった。さらに中国での記録は今迄全く知られていなかったが1985年 Z. SHI-MEI. Economic Insext Fauna of China Fasc. 31 Hemiptera (1) を見ると本種が記録され図説されていた（p.46,pl.XL-114）。分布として貴州（施秉、湄潭となっている。地図で見ると

重慶の南、広西省の北にあたり可成り南の位置）（緯度からすれば沖縄あたりにあたる所で）大変離れ地点にいることが報告されている。

以上が分布の大体のところである。日本での産地は石灰岩地帯がそのほとんどであることは注目されてよい。何かつながりがあるのかどうかと言うことはこれからの調べによらなければと考えられる。またこの虫の生態というか生活史などは小野、近藤両氏のもの（1966）、行徳直巳氏のもの（1966）以外に小林　尚博士が各ステージを詳しく図説されたものがある（四国昆虫学会々報 Vol.9,No.3,p.81-91,1967）。

食草については小野・近藤両氏によるコウゾ又はこの近縁のものの果実をよく吸液すると。また小林博士はクワの果実で4令迄の飼育が出来たとあり（1966）、九州の古処山ではイワフジ（ニワフジ）（マメ科）から多数発見吸液活動を確認したとある（鳥潟、1936）。行徳氏も古処山で採集した幼虫の飼育を試みられたがバラの実と新芽、ビワの未熟果等を入れたがバラの新芽には来て吸汁するがビワの方にはこなかったと結局飼育はうまくゆかず成虫にはならなかったとのこと（1966）、守屋・大久保両氏は代替餌（乾燥ダイズ種子と生ラッカセイを代替餌とする）で飼育に成功、累代飼育も可能との見解を発表されている（1987）。色々と報告はあるのだが、決定的な食草と言うのは今の所はっきりしていないのではないだろうか。

そして本種の図説は次の図鑑類に見ることが出来る。

1950.江崎悌三、日本昆虫図鑑　改定版

（p.188,f.467）。

1965。宮本正一。原色昆虫大図鑑　第3巻

（pl.58,f.16a,b,p.76）。

1975。立川周二、学研中高生図鑑。昆虫Ⅲ

（p.105,309）。

兵庫県での産地は初めに記した様に赤穂郡上郡と西宮市塩瀬尼子谷の2ヶ所だけである。西宮市の地点は比較的近い地点に思うのだがこの塩瀬尼子谷の付近は可成り造成がされていて住宅街がそばに出来たり切り崩しがされていると言うのか谷の入口近くには北摂建材工業砕石場と言うのが地図上に出ていたり、そのあたりいたる所に砕石場と言うのがこの最近の地図上には示されている。何分にも採集されたのが1968年であるから、かなり前であり、様相がすっかり変っているようなのでうまくその付近に入れるかどうか疑問がある。たまたま1989年度の神戸生物クラブの鑑定会が開催されたので出席しておられた西宮在住の近藤浩文先生に状況を御尋ねしたが、最近三宅隆三先生が調査に行っておられマムシの多いのに驚いておられたと言う余り面白くないお話しで、詳しく三宅先生からお話

を聞かせて頂こうと期待としていたのに、とうとうその年には三宅先生が出席されず良くわからないままになってしまった。たまたまその鑑定会の席上に新家　勝氏もお見えになってそのニシキキキンカメムシの話を御聞きになり帰宅後調べたらニシキキンカメムシの幼虫と思われるものをその尼子谷にあった夫婦岩（今は無くなっているとか）のヤブツバキの葉上から得て所有していると（16-Ⅷ-1963）カラーの図迄そえて御教え下さった。図の感じからすればニシキキンカメムシらしいのであるが見せて頂く迄何とも言えない。ただなんとなくこのあたりを調べる必要があることは事実である。

ただ、この谷のすぐそば西宮市の船坂地域の調査を1987年６回程したがアカスジキンカメムシが大変多くいる所で、成虫・幼虫共に採集できたが特に９月４日、９月11日（11日の方が多かった）何十頭と言う幼虫に出会ったりしている。同じ属の虫であり近い地点でもあるので、なんとか機会を見つけてそのあたりを調査出来たらと色々と計画している次第である。

因にこのニシキキンカメムシは年１世代で５齢幼虫態で越冬し、４月中旬頃から５月上旬にかけて羽化。成虫は５月中、下旬に交尾、５月下旬から産卵活動を始め、遅いものは６月中、下旬まで続けられると。卵は食草の葉裏に14個の塊として産付けられる。孵化した幼虫は８，９月頃迄に５令幼虫となり秋には落葉下などで越冬に入ると（小野、近藤、1966）。

(SEP.1989)

＜付記＞

脱稿後高知県での本種の記録とその飼育記並びに美しいカラープレート付の報文が“げんせい”（高知県昆虫研究会々誌）第52号（1987年11月）第53号（1989年１月）に夫々発表されていることを知った。

アオドウガネの食草についての報告（続報その４）

新　家　　勝

1989.8.4　西宮市田近野町。

背丈1.5メートル余りのウルシの幼木に、数10頭の本種が集まり、葉を食っていたもの。葉は葉脈だけになって葉柄ごと本種の重みで垂れ下がっており、葉脈でできた網袋にアオド

ウガネが袋詰めにされているといった感じであった。このウルシを食いつくした本種は、隣り合うネズミモチやアジサイの葉をも食い始めていた。

1989.8.5　伊丹市西野七丁目

ヤナギの葉を食っていたもの。

武庫川でマルタンヤンマの産卵を目撃

新家　勝

仁川合流点付近の武庫川は草むらに囲まれた水溜りがあり、ほぼ対岸の天王寺川合流点付近も流れの極めて緩かなワンドがあるので、武庫川におけるトンボの豊庫になっている。1989.8.6にこの辺りを見回っていたところ、天王寺合流付近のワンド（尼崎市西昆陽四丁目）で1♀が産卵しているところを目撃した。

クロオビシロタマゾウムシの産地

高橋寿郎

本誌前号で（p.44-45）クロオビシロタマゾウムシ *Cionus latefasciatus* Voss の分布は原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）では四国となっているが、本州新記録として辻　啓介氏が兵庫県氷の山で採集、記録されているのがある（きべりはむし Vol.1,No,1/2, 1972）むね紹介したが、本種はもっと前に岸井尚博士が新潟県粟島で採集記録されておられることを同博士からわざわざ御教示下さると共に、その所のコピーをお送り下さった（あきつ　Vol.10,No.4,p.12,1962）。文献を充分に調べなかった筆者の不注意であったので此処に訂正させて頂く。御教示下さった岸井博士に厚く御礼申しあげる。

県関係文献紹介

○　環境庁自然保護局　ふるさといきものの里　100選。　（株）ぎようせい刊（平成元年９月）（定価　2,600円）

環境庁が平成元年四月「ふるさといきものの里」（小動物環境保全地域）として119ヵ所を選定発表、これらの地域においては身近な小動物とその生息環境の保全のため地域住民と行政が協力して工夫をこらしさまざまの活動をしているとして各地を１ページに美しいカラー写真で説明されている。兵庫県下からは「住吉川上流」（p.91）、「あまがさきのホタルの里」（p.92）。「山口町のモリアオガエル」（西宮市、p.93）。「米地川」（養父郡養父町、p.94）、「ホタルの森」（多紀郡丹南町、p.95）の５ヵ所が紹介されている。

選定された事例の保護対象となっている小動物の種類別の件数はホタルが圧倒的に多く85件、次いでチョウ20件、トンボ13件があり一般的に人気のある虫が選ばれている。見て楽しい文献である。

○　釜城生物　再刊号No.1　60p.　三木高等学校生物部

釜城生物とは三木高校生物誌として1960年頃を中心として１―10号まで発行されたことがあるようで暫く跡絶えていたのを本会々員永幡嘉之氏が此処に再刊号No.１として出版されたものである（150部発行とある）。60p.全部永幡氏お一人によってまとめられている。p.５－17。中学生の３年間に採集したカミキリムシには兵庫県下で採集された120種のリストがある。中には県下での産としての記録の少ない種もふくまれている。ただ兵庫県産としての報告では注目種だけとりあげられてもよかったのではないだろうか（兵庫県産のカミキリムシは現在291種記録されている）。それよりか調査地を限定したカミキリ相をまとめられたらよい様に思われた。併しながら、貴重な記録もふくまれているので大いに参考になる。その意味から学名は入れてほしかった。それからすればp.18―58に三木市大村の昆虫類　Ⅰ.蝶相をまとめられれているが一つの地域での蝶相であるが、69種各種毎に分布地図もつけられて非常に有益な報文になっている。一人でこれだけのまとめをされた永幡氏の御努力に感心させられるが、No.２以後の発行を是非期待したい。貴重な文献を御恵送下さった永幡嘉之氏に厚く御礼を申しあげる。

○　兵庫県立自然系博物館（仮称）準備室ニュース　No.1

会員の皆様には先刻御承知のことと思われるが、1989年12月21日付表記ニュースが送られて来た（おくられて来たのは1990年１月10日）、なかなか立派なカラーによるニュースでこの様なニュースがつづいて発行されてゆくとすれば、多くの人々の眼にもふれ関心も高まり資料の収集も楽になると考えられるので是非続けて頂きたい。ただ、どの様な所にくばられているのか良くわからない

が案外知らない人が多いのかもしれない。また、1月10日の神戸新聞では自然系博物館へ収納された中西　哲コレクション、菊池貝コレクションを大きく取扱われ紹介されている。自然博物館が次第に一般の方に知られてゆくことは大変結構なことである。仲々準備が大変だと思われるが、是非立派な博物館を作ってほしいものである。（1990年3月　No.2が発刊された）。

尚、山口福男氏と筆者は兵庫県立自然系博物館（仮称）資料調査員（昆虫）と言うことになっている。県下の昆虫に関しての資料とかコレクションで博物館へ提供してもよい、或いはこの様なものがあると言った情報など、なんでも結構、御連絡を頂ければ幸いである。

○　自然とともに　No.1（1988・Ⅱ）～No.9（1990・Ⅱ）

本誌 Vol.16,No.1において本誌の創刊号が送られて来たと言う紹介をさせて頂いたが、その後順調に発行されており平成2年2月には第9号が送られて来ている。昆虫に関する記事はほとんどないが色々と参考となる資料も出ている。

筆者の所へは自然保護指導員連絡会（山口福男会長）のメンバーということで送られて来ているが、どう言った範囲での配布先なのかよくわからない。

○　佐用ライオンズクラブ　千種川の生態　第17集　32p.（1990・Ⅱ）

平成元年秋に実施された千種川水生生物調査の結果をまとめられた報告である。この調査は今後も継続事業として実施されるようで、大変な調査であるが非常に貴重な記録として今後の発展を望みたい。

（T）

<訂　正>

前号（Vol.17,No,2）新家　勝氏の報文「宝塚大橋の照明燈で採集した蛾（続報その9）」の中でp.32上から4行目の所大きく脱落していました。著者に大変申し訳無いことを致しました。ここに謹んで訂正させて頂きたいと思います。

（誤）　見通し位置にある六甲山系や長尾山系の眼下に……

（正）　見通し位置にある六甲山系や長尾山系のものが飛来しているといえよう。ちなみに武庫山や川面方面から武庫川を見下すと、眼下に……

学会誌・機関誌・連絡誌

（Ⅹ・1989―Ⅱ・1990）

混虫ずかん（但馬むしの会連絡誌）

No.22（Ⅹ・1989）．No.23（ⅩⅡ・1989）．

No.24（Ⅱ・1990）．

生物甲陽（甲陽学院高校生物部）

16号（Ⅳ・1989）

ひろおび（播磨蝶友会々誌）

No.8（Ⅶ・1989）

宝塚の自然（兵庫県自然保護協会宝塚支部）

No.4（ⅩⅠ・1989）

兵庫陸水生物（兵庫陸水生物研究会）

No.34（ⅩⅡ・1989）

の　せ（大阪昆虫同好会連絡誌）

Vol.18,No.9,10,11,12,13（ⅠⅩ・1989～ⅩⅡ・1989）

編　集　後　記

○　本年もどちらかと言えば暖冬のようでした（結構寒い日もありましたけれど）。桜の開花も例年より早かったようです。

いよいよ採集・観察の好期になってまいりました。皆様方の御活躍をお祈りします。

○　最近「野生動植物保護法」（仮称）の見直し制定がとりざたされ始めています。昆虫採集を否定しつつある現在の風潮は大変悲しいことに思われます。

昆虫採集が趣味として存在しなくなることは納得出来ませんが、現在の自然破壊からして何等かの規制が必要なのかもとも思われます。

○　やっとVol.18,No.1を発行出来ました。原稿難で相変らず四苦八苦です。

全国的に昆虫関係の定期印刷物の遅刊が多いようです。定められた様に出版が難しいことはよくわかります。ただ年が改まって昨年日付号が送られてくるのは余り感心出来ないように思いますが—。

○　次号は11月にお手許に届けられる様努力致します。（T）

きべりはむし　第18巻第1号

1990年5月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652　神戸市兵庫区氷室町1丁目44　高橋寿郎方

振替　神戸7－26646

印刷：㈱　文　尚　堂

〒652　神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11